

令和7年第1回

幸手市教育委員会定例会会議録

| | | | | | | |
|-----------------------|----------------------|---------|-----|---------------------|-----------|-----|
| 招 集 期 日 | 令和7年1月21日（火）午前9時30分 | | | | | |
| 開 会 場 所 | 幸手市役所第二庁舎 2階 第1会議室A | | | | | |
| 開会の日時・宣告者 | 令和7年1月21日（火）午前9時30分 | | | | 山西 実 | |
| 閉会の日時・宣告者 | 令和7年1月21日（火）午前11時42分 | | | | 山西 実 | |
| 出席 状 況 | 職 名 | 氏 名 | 摘 要 | 職 名 | 氏 名 | 摘 要 |
| | 教 育 長 | 山 西 実 | 出席 | 教 育 委 員 | 藤 沼 寛 次 | 出席 |
| | 職務代理者 | 会 田 研 司 | 出席 | 教 育 委 員 | 古 沢 万 友 実 | 出席 |
| | 教 育 委 員 | 高 島 勝 也 | 出席 | 教 育 委 員 | 林 晴 実 | 出席 |
| 傍聴人：0人 | | | | 書 記：関 口 智 章・河 口 奈 緒 | | |
| 議 事 参 与 者 | 職 名 | 氏 名 | 職 名 | 氏 名 | | |
| | 教 育 部 長 | 仙 田 茂 雄 | | | | |
| | 教 育 総 務 課 長 | 大 竹 孝 典 | | | | |
| | 学 校 教 育 課 長 | 中 沢 朋 宏 | | | | |
| | 社 会 教 育 課 長 | 松 阪 隆 一 | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |

| 会議事件名 | 顛末 |
|---|--|
| <p>開 会 午前9時30分</p> <p>日程第1 前回会議録の承認</p> <p>日程第2 協議事項 幸手市の教育の未来 について</p> | <p>教育長 開会を宣する。</p> <p>教育長 令和6年第12回教育委員会定例会の会議録の内容について質問を求める。 《質疑》 質疑なし。 《承認》 全員異議なく承認。</p> <p>教育長 幸手市の教育の未来について、委員の皆様の思いや考えについて、フリートークの形で聞かせていただきたい。 《質疑》</p> <p>藤沼委員 今の教育については、新学習指導要領の元に3つのキーワードである最適化と協働と探究が十分に機能していると思っている。スタンダード授業や道徳面を見ても、きちんと地域と密着して取り組まれ、いい方向に行っていると感じている。 近未来はどうかというと、世の中の流れ、特に経済的な面で、経済格差とそれに伴う不登校問題であるなど、その時代の問題が出てくるであろうと考えている。そこに対応するためにも、GIGA スクール構想の成功をベースに精査し、勤め人が多い幸手市のカラーに合った教育の形に仕上げていかなければならない。 もう一つ、令和9年度に義務教育学校が開始されるので、その効果を見ながら取り組んでいけばいいと思う。 最後に、教育委員会の事務局や学校の教職員の健康も大切である。働き方改革を進めるため、フォローアップが必要である。 まとめると、今の状態をきちんと精査して、重点施策を</p> |

しっかりと進めていくことが大事である。

高島委員

テレビドラマで、「エリートとは何か」という問いに「弱者救済ができる人」という話があった。

教育の最終目標は、他人を幸せにすることで、自らも幸せになることだと言われている。今は、価値観が逆行し、自己的、利己的などところが多くなっている状況にある。

例えば研修医では、全部の科を経験させ、最終的に自分の専門を決めて進むが、今の医療現場では研修医をしっかり育てる時間がないと言われている。その結果、急患がなく定時で帰れる特定の科に行く医者が増えている。すると、働き方は楽である一方、問題が起きたときに対応ができないという医者が多くなってしまふ。

教員も同じで、新任として教科指導や生徒指導など色々な先生に教わるが、教員が自分の学校の同僚と教え合ったりする時間が実際にあるのかということが問われている。教育の質を維持できるのか、今の働き方ではそういう余裕がない学校が多いのではないかと懸念している。

指導する教員もいないだろうし、指導することでパワハラだとか言われかねない。幸手市の教育の未来に良い影響を与えるためにも、時間的な余裕も含めて、教え合う、高め合うという文化が学校の中に作られ育てていくということが大切ではないかと思う。

古沢委員

授業で子ども達が目をキラキラさせて、「先生の話を知りたいから学校に行く」となれば、多少の諍いがあっても子ども達が学校に行く意義がある。教員が自分の生きがいを楽しんだり、子ども達の成長を同じくらい楽しめる余裕があるとないとでは、授業の成り立ちや習熟度も変わってくるのではないかと思う。

普段、教員が不登校の子を朝早くに迎えに行くと、登校渋りがあるような子は一緒に付き添ってくれるのを見ると、本当にありがたいと思う一方で、教員の体調は大丈夫なのかという心配もある。

教員数が増えるということも大きいですが、それだけでは早急に対応できないし、新任の研修も増えてしまうので、やはり業務の軽減が一番早くできる対策だと思う。

教員が授業の合間にも子ども達を見てくれるのは大変ありがたいが、教員じゃなくてもできる仕事のフォローはあると思う。自分でチェックをして、コメントも丁寧に書いてくれているが、カリキュラムも増えている中で、教員がやることが新しく増えたら、何か一つ手放す勇気も必要だ。

例えば音楽教室では、授業の最後に宿題の練習の時間を設ける。そうすると、宿題のやり方を間違えることはないし、宿題の続きを帰宅してすぐに始めることができる。これにより心理的負担が少なくなる。学校でも、時間の都合で難しいかもしれないが、帰りの会などで宿題のやり方をチェックできれば、それをきっかけに1日の日課を見直してみようとか、そもそも宿題の出し方をオンラインにするとか、教員も子ども達もウィンウィンになるような仕組みに変わっていくといいと思っている。

高島委員

子ども達は、アプローチの仕方は皆異なる。同じ作業をしても、習得する子と習得しない子がいる。今、高校生の11人に1人が通信制になっている。つまり、学校に行かないでオンラインで勉強をしたり、不登校の子も自分の好きなことをインターネットで見つけてやるということをやると、教員も考えることで負担が減る。そういうことをやっていくことが、これからのデジタル社会に向けて必要で、彼らが立ち直ったときに、しっかり身につけて技術や知識で再度チャレンジできるようにすることで教員の負担も少なくなってくる。

何がきっかけで興味が爆発するかわからない。そういう意味でもこれからの時代は、インターネットを使った学習の場を広げていくことで、子ども達の知識や技術の習得にプラスになっていくと感じた。

学校教育課長

自分が現場にいたとき、教員が職場にいる時間を減らしたいということと、教員がやりたいことの乖離があった。その時は教員とよく話し、改善に持っていくことができた。ただ、どうしても時間に追われている部分があるので、手放さなければならないことがあるのは感じている。何でも「自分がやらなければ」という思いが負担になってしまうこともあるので、例えばスクールサポートスタッ

フを配置してもらい、印刷やハンコ押しのような教員でなくてもできることは任せるなど、教員の意識も変わってきている。

文部科学省のガイドラインでは、朝早く子どもを迎えに行くことが教員の仕事なのか、あるいは、登校時に校長が地域を一回りして挨拶することが学校の仕事なのかということに対し、学校の仕事ではないとされている。

しかしながら、今までやっていたことをやめてしまうと、学校が冷たくなると受け止められてしまうのではないかという思いもある。教員の過剰サービスになっていた日本の教育は、少し見直す時期に来ているのではないかと考えている。

林委員

地域のボランティアによる学校応援について、いくつかの自治体の小学校や教育委員会に意見聴取をし、考察した。

まず、共通点として4点挙げられる。1点目は、自治体の雇用による支援員がいるということ。教育支援員や各種相談員、スクールサポートスタッフなど、様々な支援員が自治体により配置されている。2点目は、無償ボランティアがいるということ。地域住民が学校応援団のような形で、登下校の見守りや読み聞かせ、環境整備などにおいて活動している。一方で、3点目として人材不足も見られた。ボランティアの確保が課題となっており、人材発掘が期待される。4点目は、マッチングの課題について。学校のニーズとボランティアのスキルや意欲のマッチングが十分でなく、データベースの充実が求められる。

次に、問題点と今後の課題について。人材不足やマッチングが課題であることはすでに述べたが、その他として、無償ボランティアに過度な負担がかかってしまう可能性、専門的な知識やスキルが必要な活動の場合に適切な人材を確保することや、ボランティア活動の継続性を確保することが難しいということがある。

これらの改善策として7点挙げたい。1点目は、多様な募集方法について。学校だより、ウェブページ、地域コミュニティ、SNSなど、様々な方法でボランティアを募集する。2点目として、スキルマッチングについて。地域ボランティアのスキルや経験、興味関心を把握し、学校のニ

ーズとマッチングさせる登録システムを構築する。3点目として、動機と継続性について。学校支援への関心を高め、活動にやりがいを感じてもらうために、活動を継続するために必要なサポートを検討し、学校に生じた変化を分析する。4点目は、インセンティブについて。ボランティアへの感謝を伝えるため、感謝状や研修会への参加案内など、活動に対するインセンティブを検討する。5点目は、評価と改善について。ボランティア活動の効果を定量的に評価し、その結果に基づいて改善策を検討する。6点目は、地域との連携強化について。地域のボランティア団体やNPOとの連携を深め、人材の確保と活動の活性化を図る。7点目は、多様な主体との連携について。地域住民だけでなく、企業、NPO、大学など、様々な主体との連携の可能性を検討することで、より多角的な応援体制を構築する。

さらに、今後検討が必要な課題として、ボランティア保険の導入、ボランティア活動の広報活動の強化と、学区にこだわらない人材データベースの充実、ICT指導ボランティアの検討、アフタースクールの量的評価と一層の充実、中学校への拡大検討が考えられる。

最後にまとめとして、それぞれの学校に効果的なボランティア制度の検討のみならず、市として何ができるか模索していくことが大切と思われる。

教育長

これからの学校を考えていくときに、いかに外部人材を登用していくかということは必要になってくるが、なかなか定着できない部分もあるだろう。幸手市では学校応援団があって、学習支援というよりは体験活動を中心にしている部分が多いと思う。

藤沼委員

昭和の時代と社会システムを見ると、中学校や高校を卒業したら手に職をつけるかとか、勉強が好きなら学校に行きなさいとか親が導いてきた。それが良いか悪いかではなく、当時の高度成長時代はそうするしかなかった。それにより、あれだけの経済成長があった。そこから教育を含めた社会システムが進化したかということ、あまり進化していないと感じる。日本の社会システムはこうあるべきというものが出てきていない。

過去に色々なバラマキもあったが、社会システムを変えるまでには至らなかった。今まさに求められているのは、地域システムの構築であろうが、過疎地は過疎地の社会システムが、東京都は東京都の社会システムがあり、それぞれ違っている。

その社会システムを意識した家庭と地域と学校の連携を構築していかないといけない問題が潜在化していると感じる。例えば区長とか地域の役職があるが、なかなか刷新できていない。これを変えるのは女性の力だと思う。

高島委員

地域との連携という点では、例えば朝早くから校長が見て回るところは良いという価値判断があったり、そうじゃなくてもいいという人もいるし、学校は、万人から良いと思われることを求めてしまうと難しくなってしまう。どこをやめて、どこに重点を置くかというところは、学校がそれぞれ違っていいと思う。学校の独自性を認めてくれる地域とそうでない地域の差が大きな問題だろう。

学校が子ども達のためにいいと思ってやっても、結果的に失敗もあるし、成功もある。そこに地域の理解が得られるか、寛容さを持ってほしいと思っている。

地域によって色が違うので、学校がやることに興味を持ってもらい、意見を出してもらおう。それを校長が取捨選択をしながら学校経営を進めていくというところを皆さんで支えていただくことが学校としてはとても助かると思う。

会田職務代理者

地域の教育力を利用できると効果は大きいですが、調整や連絡に時間がかかり、それが働き方改革の中では大きな負担になると校長時代に感じた。

中学校では職場体験授業があり、中学生にとって大人と触れるということは緊張感を持って教育的意義が大きいですが、それまでの調整や、そこに行くまでの生徒の安全確保という点など、とても負担があった。

また、福祉体験をするにも、社会福祉協議会と連携をとって、展示や、アイマスクのような色々な体験をさせるが、やはりそこに至るまでの準備が学校にとっては大変だったと思う。

教科を教えるという点では、担当者の負担は大きくないが、地域との連携をしていくとなると教育的効果が大
きい反面、連絡調整に時間がかかることになる。

中学校の校長を務めていた当時、隣にある県立高校の
校長と連携して、夏休みに高校生が指導に来てくれると
いう取組みを実施した。それぞれの学校の特色を生かした
地域との連携が一番望ましいと感じている。

以前、新聞の投書欄で、ベビーカーを持って電車に乗ろ
うとする母親が、「いつも高校生や乗客に助けてもらって
いる。自分の子には、たくさんの人の力を借りて育ったこ
とを伝えていくつもりだ。そしてその子自身も自然に人
に力を貸せるような大人になってほしいと願っている」
という記事を見た。

先ほど話が出たように、最終的には社会に出て人の役
に立つような教育をしていけばいいと思うし、また、今ま
での日本の教育は、一定の成果をあげてきているからこ
そ日本が安心で安全で、親切な国になったと感じている。
新しいことも大事だが、今までの良さをしっかりと見つ
めたいのでこれからの教育を進めていってほしいと願
う。

最後に、働き方改革について。自分は本当に無我夢中で
やってきて、あまり忙しかった、辛かったという思いはな
い。単に仕事を減らしたからよかった、早く帰ったからよ
かったということではなく、何が大変なのか、何が心身を
疲れさせるのか、教員が負担に感じることは何なのかを
管理職も教育委員会も探っていく、負担を軽くしてあ
げることも働き方改革だと思う。

林委員

先日、ウェルビーイングという考え方について勉強す
る機会があった。時代の変遷とともに考え方が少しずつ
変わっていくと感じた。現場の教員が誠実な人の集まり
だということは認識しているが、ある程度は効率性も追
求してもいいのではないかと感じた。

例えば、先ほどのボランティアのデータベース化につ
いて、マッチングしようとしても電話番号しか登録がな
い場合がある。連絡を取るにはメールやFAXで一括送
信できると負担が減るが、電話して調整すると考えると
自分でやった方が早いになってしまう。

社会教育課長

さって市民生きがい教授という人材バンクをデータベース化してウェブページに情報を掲載しているが、利用者は少ないと認識している。学校にも情報を出すようにしているが、学校のニーズと合わないことが多い。

高島委員

OECDが教育の未来について4つのシナリオというものを掲げている。1つは学校教育をもっと拡大していくということ。もう1つは学校教育のアウトソーシングで、外から人を入れるということ。もう1つは学びのハブとしての学校。最後が行く場所が全て学びの場所ということ。

アウトソーシングに関しては、危機管理が特に難しい。学校は何よりも事故を恐れる。どこの自治体も人材バンクはあるが、時間の負担と同時に、知らない人を学校の中に入れるというリスクもある。アウトソーシングは、教育の中では難しいので、今も取り組んでいる体験型が一番いいと思う。

将来的には「学びのハブとしての学校」を進めることが望ましい。今の学校の機能を保持しながら、それぞれの子ども達のニーズや、保護者、地域のニーズに沿って学びの場を提供するということが一番いいと思っている。

教育長

体験型と言えば、地域の皆さんが自分達で判断して動いているところもある。自ら学校のスケジュールの把握や、講座等での教え方を勉強し、声がかかる時期になると地域の皆さんが待っている。地域の熟成と言っていいと思う。

高島委員

アメリカでは校長の権限が強く、例えば教員が長期休暇に入ると、校長が代替職員を雇用することができるが、リスクもある。日本は安全第一であり、文化の違いもあると言える。

今後は、学校経営者として経営理念を持って取り組む必要がある。いかに地域からの信頼を得られるか、校長の手腕が問われる。

| | |
|--|--|
| <p>日程第3 議 事</p> <p>専決報告第1号 令和6年度幸手市一般会計補正予算(第7号)教育費の要求について</p> <p>専決報告第2号 会計年度任用職員の任免</p> <p>専決報告第3号 臨時的任用教職員の内申</p> | <p>教育長 専決報告については、一括して説明・報告を行い、その後、質疑を受けたい。</p> <p>教育部長 議案書により説明する。</p> <p>学校教育課長 議案書により説明する。</p> <p>学校教育課長 議案書により説明する。</p> <p>《質疑》 質疑なし。</p> |
| <p>日程第4 行政報告</p> <p>1 教育長報告</p> <p>2 事務局からの 主要な報告</p> | <p>教育長</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 各種教育長会議等 2 講演等 <p>教育総務課長</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 学校再編について <p>学校教育課長</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 表彰関係 2 幸手市ウィンター教育セミナー「幸手・桜の学びセミナー」特別講演会 3 入学説明会 4 今後の主な行事予定 5 市内中学校・スキー学校の日程 6 幸手市中学校部活動 地域移行について <p>社会教育課長</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 令和7年度幸手市二十歳を祝う会 2 東部地区社会教育関係委員・職員研修会 <p>社会教育課長 (公民館)</p> |

| | |
|--|---|
| | <p>1 利用状況 2 事業報告 3 今後の事業予定</p> <p>社会教育課長（郷土資料館）</p> <p>1 報告事項 2 今後の事業予定</p> <p>社会教育課長（図書館）</p> <p>1 報告事項 2 利用状況 3 今後の事業予定 4 予約の多い図書（上位5冊）</p> <p>社会教育課長（体育施設）</p> <p>1 利用状況 2 自主事業 3 今後の自主事業 について資料により説明する。</p> <p>《質疑》</p> <p>藤沼委員 全国健康づくり推進学校表彰でさくら小学校が表彰されたことは大変素晴らしい。表彰されるためにはどのような条件があるのか。</p> <p>学校教育課長 県内でも数校しかないとても良い結果だった。書類審査と今までの実績から評価されたと認識している。</p> <p>藤沼委員 使用料に関する条例改正が否決されたとのことだが、今後、どのように動いていくのか。</p> <p>教育部長 現時点では未定である。議会で否決されたのは、説明不足であることが主な理由であった。いきなり改定額が示され、審議の時間がなかったという声があった。いつとは決まっていないが、仕切り直して再度議会に上程することになる。</p> <p>藤沼委員 図書館のトイレの照明がLED化された。とても明るく、安全にもつながると思う。感謝する。</p> <p>社会教育課長 子どもが怖がるという声もあった。可愛いイラスト</p> |
|--|---|

| | |
|--|---|
| <p>日程第 5 その他</p> <p>1 次回以降の会議 日程</p> <p>2 次回の協議事項</p> <p>3 令和 7 年度教育 委員会定例会等実 施予定（案）</p> <p>4 その他</p> <p>閉 会 午前 11 時 42 分</p> | <p>トも入れ、怖さをやわらげる工夫もされたと思う。</p> <p>各委員の意見を調整した結果、2月の会議について、次のとおり決定する。</p> <p>令和 7 年第 2 回教育委員会定例会 日時 令和 7 年 2 月 10 日（月） 午前 9 時 30 分 会場 幸手市役所第二庁舎 2 階 第 1 会議室 A</p> <p>教育総務課長 2 月は、主な議題として令和 7 年度当初予算があることから、割愛させていただく。</p> <p>教育総務課長 資料により説明する。 《質疑》 質疑なし。 《承認》 全員異議なく承認。</p> <p>なし</p> <p>教育長 閉会を宣す。</p> |
|--|---|

| | |
|--------------------------|---|
| <p>ほか特に重要 と認める事項</p> | <p>なし</p> |
| | <p>上記会議の顛末を記載し相違ないことを証するため、ここに署名する。</p> <p style="text-align: right;">令和7年2月10日</p> <p style="text-align: center;">教 育 長 山 西 実</p> <p>署名</p> <p style="text-align: center;">署 名 委 員 林 晴 実</p> |